

小浜藩儒・興田吉従の遍歴（上）

―伴信友の「ともだち」（二）―

中島 嘉文

はじめに

小浜藩は江戸時代における朱子学、なかでも一大学派を形成していた山崎闇斎に始まる崎門学の拠点の一つであった。

崎門三傑の一人浅見綱斎に師事した若林強斎の京都の家塾望楠軒^②には享保の頃、多くの小浜藩士が学んだ。そのうちの一人で強斎の高弟とされた山口春水（庄右衛門・安固）の藩主への推挙により、望楠軒講主を継いでいた小野鶴山が小浜藩に招聘されたことから、藩の学統は崎門学に統一されていった。^④

鶴山の後には、これも望楠軒講主となっていた西依墨山（丹右衛門）を家中教授役に召出して安永三年（一七七四）正月、藩校順造館が創設された。江戸藩邸にも信尚館（上屋敷）、必観楼（中屋敷）、講正館（下屋敷）が相次いで開かれ、とくに信尚館や講正館で崎門学を教授した藩儒山口菅山（貞一郎・重昭）は、小浜藩だけではなく

く他の藩主・藩士も師事し江戸の儒者として重きをなしていた。^⑤

こうして小浜順造館だけでなく、藩が財政支援した京都望楠軒や江戸藩邸で教授された崎門学であるが、藩校や門弟の蔵書等が、酒井家文庫のほか、若狭高校図書室（菅山門弟、順造館教授の藤井永図蔵書）やおおい町本郷の山口家（菅山門弟、公用人などを勤めた岸本省吾蔵書）に残されている。さらに、平成二八年（二〇一六）、西依墨山以降代々順造館教授を勤めた西依家の蔵書等^⑥が小浜市に寄贈された。

これらの崎門学関係資料群と小浜市立図書館蔵の伴信友文庫や鈴木重威家文書等にみえる、地域史としてはほぼ忘れられた小浜藩儒・興田^{おきた}十左衛門吉従^{よさゆ}は、国学者信友が「ともだちなる葛根、吉従^⑦」と呼ぶほどに信頼を置く同学の士であった。吉従は今も研究者が利用する「成斎先生雑話」や「諸家々業記」などの著作のほか広く古写本の蒐集や校合を行なっており、この分野では信友の先達でもあっ

た。また、平田篤胤も主著『古史伝』に「吾カ友興田吉従云」とその言説を引用している^⑧。

西依成斎に教えを受け、小浜藩校順造館勤めの興田吉従は、寛政末から本居宣長の古学（国学）に傾倒し、享和元年宣長最後の上洛時には吉従も小浜から上洛し一か月余親しく会した^⑨。ここでは儒者として小浜藩に召抱えられた吉従の崎門学と古学（国学）との間の遍歴と伴信友との交流（協同）を、出来得る限り興田吉従の居所を明らかにしながら辿りたい。

なお、最初にお詫びしておかなければならないのは、令和四年三月刊『西依成斎人と書』の拙稿西依孝鐸の「文化十一年戊戌年 日記」四では「京都所司代勤めの儒者奥田吉従、側記録用懸伴信友、右筆津田葛根」とした。酒井家編年史料稿本の綱文が「奥田十左衛門吉従」とし、『小浜市史』藩政史料編二の「文化八年京都分限帳」や同通史編（上）、鈴木重威家文書目録でも「奥田十左衛門」としてゐるのに倣った。

しかし、その後文献調査を進めるなかで、酒井家文庫の「風水草」と「土金竜雷伝」の奥書には楷書で「寛政七年孟春 興田吉従謹記」、「寛政己未年正月九日 興田吉従謹書」とあり、『平安人物志』（文化一〇年）にも儒者として「興田吉従 号箕山又号遅斎姉小路西陲興田十左衛門」とある。また、迂闊な事だが、前述「文化十一年孝鐸 日記」には小浜藩士興津（善蔵）の興が何回か興田と同じ筆使いで並記されている^⑩。以上から、奥田ではなく「興田十左衛門吉従」と読むのが正しいとした。

一 吉従の出生と崎門学

興田吉従は、本誌三一五号で紹介した小浜藩士津田葛根とは異なり、『国書人名辞典』などいくつかの辞典類で立項されているが、『本居宣長事典』（本居宣長記念館、二〇〇一年）の山崎美紗子氏の記述が最も詳しく正確である。

興田吉従^{よきつ} 生没年不詳。若狭小浜（福井県小浜市）の漢学者・考証学者。通称十左衛門、号は箕山。京の儒者西依成斎の門人。享和元年（一八〇一）四月、上洛中の宣長に面会。門人録の諸本の一つに名が記載される。しだいに古学に傾倒し、京都の鈴屋門の城戸千楯、江戸の屋代弘賢などと交友があった。小浜の国学者伴信友・石田千穎らと親しく宣長の没後、京都藩邸にいた伴信友らとともに古写本の蒐集、校合を行った。

注目されるのは吉従が、江戸、小浜、京都の三か所で学問、教育を行っていた点である。以下、その居所に留意しつつ篤学の士興田吉従の生涯を辿ってみたい。

（一）吉従の出生と父興田作一郎

興田十左衛門吉従（幼名文蔵）は、吉従が文化八年（一八一二）小浜藩に提出した由緒書によれば、安永二年（一七七三）、興田作一郎（敏）の惣領として江戸に生まれた。伴信友もこの年に小浜城下に生まれており、二人は同年であった。

吉従由緒書によれば、興田家は先祖を三好長慶の家臣荒木馬之助とし、数代摂州武庫郡西宮に居住の後、父作一郎が江戸へ出て医術

を家業にして「町宅」したとする。酒井家に入りして本覚院（第九代小浜藩主酒井忠貫）の脚氣を治療し全快させ、以後「毎年御金被下置」れ、御機嫌伺に出入りする度に「紋服等」を拝領した。

このことに関連して、作一郎は他の大名家にも出入りし、とくに阿波徳島藩主よりは「合力」として二〇人扶持が与えられ、作一郎死後も文蔵（吉従）に五人扶持が与えられていた。作一郎は徳島藩主に医療だけではなく崎門学を講じていた可能性がある。

というのは、『崎門学脈系譜』¹³に、作一郎を若林強斎の高弟であった当舎修斎（清介、摂津人、仕尼崎藩）の門人として「興田敏 称作一郎、住江戸」とあるからである。

さらに、山口春水が師若林強斎の言行を記した『強斎先生雑話筆記』全六巻は「江戸時代に成った言行録の内でも、最も精彩に富んで居」るとされるが、そのうち「巻六 雑話」だけは春水の同門、当舎修斎の筆になる。その巻六の跋は春水の六男山口風簷（信八郎）¹⁴が記したものとされ、そこには

右筭記¹⁵一冊ハ、興田氏ノ家ニ伝ハル。文蔵信直¹⁶之¹⁷子¹⁸携ヘ来リテ曰ク、此ハ強斎先生ノ雑話ナルベシ（中略）僕反復熟読ス。其説多クハ尋常ナラズ。先生ノ雑話ナルコト必定也。（中略）当舎氏ハ強斎先生ノ門人也。昔時先人ト同ジク京師ニ先生ニ従学スルニ当ツテ、其ノ名聞エシ人也。蓋シ当舎氏¹⁹従学ノ間、先生ノ雑話ヲ記録シ、草稿ノマ、興田氏ニ付シタルモノナルヘシ。

とある。小野鶴山の季女（末娘）を妻とし、鶴山の後継者として江

戸の小浜藩邸で崎門学を講じていた風簷は、京都に赴きこの巻六を、成斎に見せたところ「是レ当舎氏ノ手筆也」とされたので、春水の「雑話続録二附シ置」いたとする。巻六は、当舎修斎が作一郎に預けたもので、医療を家業とした作一郎の崎門学修学も相当なものがあつたと推測させる。

（二）山口風簷の養育

興田作一郎が天明四年（一七八四）に死去すると、この時一二歳の吉従は「内縁」のあつた山口風簷（信八郎）に引取られ養育された。この内縁を、吉従の一歳上で風簷の嫡男、鶴山の孫にあたる山口菅山がその撰『鶴山先生小伝』¹⁶に次のように記す。

翁有一男四女、男早夭。長女名順、適松原敬輔、生二子誠輔・蘭斎（誠輔仕吾藩、蘭斎為吾藩医乙竹昌順養子）。次女名左乃、西依墨山養為子、適近江高宮農古戸善兵衛、生一子。称善太郎、後改善兵衛。三女名陸、適興田作一郎（業医於府下）、生一女、名牀。季女乃予母君也。

この記述によれば、作一郎の妻は小野鶴山の三女陸で、末娘が風簷の妻であり、吉従と菅山とは従兄になる。ただ、陸は「生一女、名牀」とあり、吉従の実母ではないかもしれない。なお、西依墨山の養女として育てられた二女左乃の嫁いだ近江高宮の農古戸善兵衛も父善兵衛が若林強斎の娘・冬を妻としており、望楠軒と深い関係があつた。¹⁷

興田吉従は、京都望楠軒の学統のなか、小野鶴山、山口春水家との姻戚関係により、父作一郎死後は江戸において山口風簷の膝下で

育てられ、嫡子菅山と共に崎門学を学んだことになる。

江戸での吉従（文蔵）、菅山（貞一郎）の生育の一端を、土佐藩の南学の歴史を記した寺石正路『南学史』第十四「山口菅山篇」所収の宮地（仲枝）日記が伝える。¹⁸

天明八年十一月十日（箕浦）右源次、（桑名）玄井同道二而酒井様上屋敷西依丹右衛門（墨山）殿へ行、詩経会の中に而出席も数輩有、講釈承ル、面白し^{文二}、会散して酒杯等も有之、夜二入彼宅出五ツ前帰邸、山口信八郎（風簷）も坐二在、其信八郎嫡子（菅山）、興田作市嫡子も在坐、給仕す。

天明九年三月廿五日 御殿山花見行 西依丹右衛門（墨山）、山口信八郎（風簷）、同貞一郎（菅山）、興田文蔵、箕浦右源次（立斎）、刈谷道悦、浅野圓庵及予。

西依墨山はこの年の一〇月に初めて江戸勤番を命じられての参府であった。¹⁹ 十一月二日に墨山が風簷と共に旧知の箕浦に挨拶に行つた返礼が一〇日の記事である。日記は、小浜藩と土佐藩儒者間の親密な交流を示すとともに、吉従の父作一郎が土佐藩の儒者の間にも名前が知られていたことを示唆する。

菅山と吉従は詩経会に出、またその後の酒宴の給仕をした。翌天明九（寛政元）年春には桜の名所御殿山の花見行にも加わっており、二人は小浜藩の崎門学を担うべく育てられていた。

二 小浜藩儒として出仕

（一）小浜へ遊学

寛政元年（一七八九）閏六月、一七歳の興田吉従は藩主酒井忠貫上国の御供をする西依墨山に従い小浜に遊学する。吉従由緒書は、小浜藩出仕以前の学問修得については何も記していないが、この時の小浜遊学が窺える吉従（信直）の七言律詩が西依家文書に遺されている。²⁰

奉送

墨山西先生再赴江都

去歲従 君遊若耶

今年相送殘端涯

征途縦極名山勝

到日応悲故国賒

士嶽崢嶸夏余雪

函山瞻望筆生花

行通五十三亭後

依舊東都厨麗華

興田信

この吉従の漢詩は、翌寛政二年五月、藩主参勤に再び随従し江戸に向かう墨山を見送った時のものである。

江戸では同年九月二十九日、藩主忠貫と前大納言久我信通の養女（実は大炊御門家孝の娘）との婚儀が予定されていた。墨山は前年

秋には「久我様御懸合御用」で上京してこの婚約の交渉役を勤めており、連続の参府はこの婚儀にも関係していた。「依舊東都尉麗華」はその挙式の盛宴を想像してのものかもしれない。

なお、吉従若狭遊学に遅れること一か月、従兄の山口菅山も同年七月、父風簷の願により「小浜西依丹右衛門、京都西依儀兵衛江随順」して家業修行をすることになる⁽²²⁾。

菅山の父山口風簷は自ら菅山、吉従に崎門学を教えていたが、二人の学問をさらに進めるため、西依成斎・墨山に從学することを望んだ。菅山は翌二年六月、藩主の「御道中切御次御雇」で江戸に帰る。吉従は墨山父子を「今年相送残端涯」と見送った。

(二) 西依成斎に学ぶ

小浜に残った興田吉従は、小浜あるいは京都で主に西依成斎の下で崎門学の習得に励むことになる。表1は、現在確認できる興田吉従（この時期、信直・敬勝）の写本・著作であり、表2は吉従が小浜藩に出仕するまでの寛政年間の西依成斎の居所を示す。一見して判るように、この時期成斎は小浜に居ることが多かった。

表1の①「白鹿洞揭示師説」は、朱子学の精髓とされるもので、奥書に「成斎先生講此書也、始テ寛政改元乙酉八月二日、終同月十四日也、先生八十八 山口重明（菅山） 興田信直（吉従） 児玉光貞 謹録」（一）は筆者とある。②「西銘解師説」は山崎闇斎の表章書「西銘解」についての浅見綱斎の講義筆記とされ、闇斎の神道理解の本質を示すものとされる⁽²³⁾。なお、表2によれば、寛政三年春から夏にかけて成斎は京都望楠軒へ帰り、高山彦九郎の訪問

を受けている。吉従も随伴したと思われる⁽²⁴⁾。③「（中臣祓）風水草」は山崎闇斎の垂加神道の基本書とされるものであるが、吉従は寛政三、四年頃、成斎より崎門学の中でも垂加神道に関わる神書を学んでいた。

一八世紀、神道界の一大勢力であった垂加神道で最も重んじられた山崎闇斎の③「（中臣祓）風水草」（酒井家文庫）の識語は、その附属（伝授）の過程を詳しく記す。闇斎から正親町公通卿へ、卿から玉木葦斎へ、祇園社の大江憲薩（山本主馬）へ、そして主馬から若林強斎へ、強斎から西依成斎へ附属された⁽²⁵⁾。この「風水草」を西依成斎の命をうけて天明八年（一七八八）初夏に、城代などを勤めた藩重臣の深栖緝光（典膳）が写したものを、吉従が寛政三年九月から一〇月にかけて筆写した。

表1 興田（信直・敬勝）写と著書 小浜藩出仕以前

	書名	巻丁数	（書写、成稿）年	所蔵
①	白鹿洞揭示師説	1冊 43丁	寛政元年8月興田信直外写	山口家
②	西銘解師説	1冊 45丁	寛政3年6月興田信直写	京大図
③	（中臣祓）風水草	3巻	寛政3年10月興田信直写	酒井家
④	崇神論	4丁	寛政4年7月 武蔵 興田敬勝謹識	山口家
⑤	足土根記	3丁	寛政4年9月 興田敬勝写	山口家
⑥	成斎先生雑話	上下 44丁	寛政9年7月以降興田敬勝識	山口家

注1) ①④⑤⑥は山口勝久家蔵、②は京都大学付属図書館蔵、③は酒井家文庫。

表2 寛政元(1789)～7(1795)年の西依成斎の「在若狹」に関する事項

年 号	月 日	事 項
寛政元年	正月	成斎、順造館新年の祝筵で「大学三綱領」を講じる
2年	この年	成斎、望楠軒再建の御礼旁々小浜に来て逗留
3年	正月	90歳の寿賀、正月を小浜で迎え餅9つ祝う
〃	4月24日	高山彦九郎、京都望楠軒に成斎を訪ふ
〃	11月2日	古賀精里、成斎先生見廻ノタメ小浜へ来訪
4年	2月25日	成斎、西山久平に「当春者北地日々雨雪ニ而」と書状
〃	4月24日	台命により若狹から京都へ帰り町奉行所で白銀20枚の褒賞を受ける
5年	1月晦日	成斎、墨山にいつ頃上京かを問う書状を出す
〃	9月26日	頼春水、京都望楠軒に成斎を訪ふ
〃	10月末	成斎、藩主忠貫の要請で若狹へ下る
6年	3月10日	成斎、小浜より京都望楠軒へ帰る
7年	4月	江戸の山口風簷、京都に成斎を訪れ「家業筋面談」

注)「西依成斎略年譜」等、岸本三次編『西依成斎基礎資料集』に拠る。

③「風水草」識語の最末尾は、吉従が寛政七年（一七九五）正月に、藩命で小浜へ赴くべしという内命を受けた折に書かれており、「昔年僕在若州之際」の慌ただしい中で、「手写此草」したので「字画不正持」が多いことを恐れるが、「神道之蘊奥」を究めた此書を「丈篤志」山口重明（菅山）に譲渡するとした。

寛政四年四月小浜に居た成斎は、台命により褒賞を受けることになり急遽京都へ帰る。民間の儒者として学業を「無懈怠心掛ケ極老迫篤実ニ教諭」したという理由から京都東町奉行所で白銀二〇枚を受領した^{②⑥}。褒賞の後、成斎は京都望楠軒に一年余居るが、この頃、吉従は一度江戸へ帰ったと思われる。

④「崇神記」は寛政四年七月の奥書に「武蔵 興田敬勝謹識」とわざわざ「武蔵」を入れており、また西依家文書に残された新春に西依成斎に贈った次の七言律詩からも吉従が江戸へ帰ったことがわかる。表2と照らし合わせると、吉従は寛政六年の新春を小浜で迎えている成斎にこの詩を送ったと考えられる。

春初奉寄懷

成斎老先生

春回四海景光清
物換星移自耐驚
負笈歲年曾受教
橫經何日再尋盟
北連越路千山外
東去吾妻万里情

定識新正応有賦
揮毫更願寄江城

興田敬勝拝稿

吉従は成斎老先生に教えを受けた日々を懐かしむとともに、新年に当り揮毫の江戸への送付を願っている。この詩懷紙には引首印・姓名印・雅号印が押されており、引首印「観川流之不息／志多本之無窮」からは青年吉従の学問への決意が窺える。

(三) 吉従の「成斎先生雑話」

西依成斎は寛政九年（一七九七）閏七月四日、九六歳で亡くなる。長年教えを受けてきた門弟鈴木温（潤斎）が同年九月に「處士西依先生行状」を書き、吉従が同年一月、後跋「書成斎西依先生行状後」を書いた。⁽²⁸⁾

後跋には「余蚤出于東海之隅、幸得執箕帚于先生門」と江戸に生まれた吉従が成斎の教えを受けることのできた幸運を述べ、さらに「不以青年黄口見遇棄、恩日渥而情月親」と成斎の親にも勝る愛情により未熟な青年を見捨てずに教え導いていただいたとする。後跋は続けて「今年易簣之日、亦待其左右」とあり、成斎の最後を看取った吉従は、死後四か月たった今も「聲咳髣髴猶在乎耳」とする。

吉従はこの後跋を書いた前後に、西依成斎の教え、言行を記した「成斎先生雑話⁽²⁹⁾」（以下「雑話」と略）を著したと思われる。この上下四四丁の「雑話」は、西依成斎研究の基本文献とされるが、一方では書き手興田吉従が成斎から何を学んだかが窺える。

この「雑話」の成斎言行が吉従に講じられた時期は、寛政元年閏

六月の小浜遊学直後から同四年四月に成斎が台命による褒賞のため急遽京都へ帰った頃までと考えられる。成斎八八歳から九一歳、吉従一七歳から二〇歳であり、まさに台命褒賞の理由「極老迫篤実ニ教諭等致シ」であった。

吉従「雑話」上では、まず言葉について足・手・耳など四肢五体の訓から始まり旧国名、地名、事物名などの訓義が講じられている。その後、垂加神道の重要な神書とされる山崎闇斎「風葉集」や玉木正英（葦斎）「橘家玉方陣」について著作の経緯が教えられていた。さらに、松岡雄淵（仲良）の中臣祓や「三種神籬口伝秘訣」の筆写を命じられ、「大切ニ繕写シ、家ニ秘藏ス」と記している。

ただ、成斎の講釈は一方的ではなく、例えば「鍛冶」については、吉従が神代巻を典拠に「カジ」は「カタシ」の略ではと述べると、成斎は「ナルホドヨイ考ジヤ、サウジヤモシレヌ」と述べたとある。

「雑話」下は人物についての論評が多くなる。神道家玉木葦斎に就いては「一向学問ノナイ人」「トカク神道者モ金ヲトリタガリテドフモナラヌ。」と手厳しく、熱田社司であった松岡雄淵にも「松岡ナドモ其気味ゾ」とある。

反対に浅見綱斎や若林強斎には、尊敬の念からの言行が記され、また後の寛政の三博士の一人、「肥前佐賀儒官」の古賀弥助（精里）の小浜への成斎訪問は吉従に強い印象を与えたようで、「雑話」のなかで、「寛政三年辛亥十一月二日」と唯一年月日を付して詳記している。四五日逗留の間、耳の遠くなっていた成斎とともに吉従も侍坐している。成斎は、藩校順造館での「土金伝」など神書の講書

について話をし、垂加神道の「口伝訣」などという秘密主義の弊害を指摘した。

堂上では特に右大臣従一位二条宗基について、常に「御側」で講じていたことからその早逝を惜しんで、成斎は「毎々御雑話二」その賢明さを詳細に述べていた。宗基は邸内に「以創立学校、使先生為教授」と計画していた。

「雑話」上下は、朱熹の『易学啓蒙』など経書の講釈のほか、書や隠元についてなど多様な話が記されているが、やはり垂加神道の講釈が過半を占めており、吉従は垂加神道の成斎からの口伝・附属者として教育をうけていたと言えよう。

(四) 小浜藩への出仕

吉従は「由緒書」によれば、寛政七年（一七九五）一月十九日、「儒業を以て」小浜藩に召抱えられる。「酒井家編年史料稿本」は「奥田十左衛門吉従ヲシテ亡父作一郎ノ遺跡ヲ襲ガシメ是日十八人扶持ヲ給ス」と作一郎からの継承を重んじる綱文を立てている。

吉従は翌八年正月二八日、若殿様（酒井忠進）に「神書」を進講して二日後、二月朔日に江戸を立ち同月一日、小浜に着いた。その四日後には吉従は小浜藩から、藩校順造館での教授と老衰の目立つ西依成斎の京都望楠軒での世話という二つの役務を命じられた。

また、同年九月一六日には、小浜の西依墨山が「長々病氣」のこともあり「西依丹右衛門差支候節」は、小浜藩の海防策に関係する「船手筆読役」を命じられている。ただ吉従は、翌寛政九年閏七月の成斎死去までは、基本的に京都望楠軒に居たと思われる。

吉従の著作を、『国書総目録』は四冊載せるが、そのうちの三冊はこの成斎死去前後の神書であり、現在は伊勢神宮の神宮文庫に蔵されている。

成斎死去の一か月前、寛政九年七月一七日に、神道で最高の秘伝とされた伊勢神道に由来する「三種神宝極秘伝」を玉木正英（葦斎）が編した「三種神宝極秘中秘口伝」を「後学 興田吉従」が謹誌している。

また、同一一年正月一三日に「三種神籙最極秘訣」を「濯底興田吉従」が謹書して、深栖光坦に「伝諸」した。光坦は、深栖緝光（典膳）の養嗣子で実父は第四代鞠山藩主酒井忠香であった。さらに翌一二年九月一日にも、橘家代々相伝秘中之秘とされ長大な巻物の「神体勧請伝」をこれも源光坦（深栖光坦）に伝書している。

このほか吉従は、混成翁松岡仲良が九條藤公に献じた秘本「翁伝」^{③①}を門人から借りて写したと「寛政十一年己未六月廿六日」奥書した。それを、同年一月一六日に小浜藩の本身分（石高千石）三浦義生（主馬助）^{③②}は、「右翁傳一卷者所受于興田濯底翁」として書写している。この時三浦は五〇歳であるが、「濯底翁」と興田に山崎闇斎の「垂加翁」や若林強斎の「守中翁」のように霊社号を記しているのは注目される。

「雑話」のなかで吉従は、西依成斎に酒井内匠介から故内室（持明院の息女）の神主の「陷中」と「粉面」の書き方を問目されたとして教えを乞うていた。小浜藩は、早くから吉従に成斎からの垂加神道の後継を託していたと思われる。

興田は西依成斎死去後、「濯底翁」と号して垂加神道の神書を取
得し、また小浜藩の重臣やその子弟に神書を伝書するなど、自己に
託された務めに忠実であるとともに、一方では、この時期「大祓詞
後釈」など本居宣長の著作を読んでいた³³。

寛政一二年（一八〇〇）正月一日、三〇年近く順造館教授役を
勤めてきた西依墨山が七五歳で亡くなり、この時期崎門学の拠点と
された藩校順造館や京都望楠軒は大きな転換期を迎えていたといえ
る。

三 宣長古学（国学）への傾倒

（一）崎門学から宣長古学へ

本居宣長は寛政八年（一七九六）四月に賀茂真淵「祝詞考」の「大
祓詞」の逐条に対する「後釈」である『大祓詞後釈』を、一月に
は『出雲国神寿詞後釈』を刊行した³⁴。

祝詞は延喜式に制定され、特に大祓詞が吉田神道以来いわゆる「中
臣祓」と称されて祭祀の中心的地位を占めた。この「中臣祓」につ
いての代表的著書が山崎闇斎の「（中臣祓）風水草」であった。成
斎に教えを受け、また藩重臣の意向も受けて垂加神道の神書を学ん
できた吉従にとって、宣長の『大祓詞後釈』刊行は事件ともいえる
出来事であった。この書を村岡典嗣は『増補 本居宣長』³⁵の中で「祝
詞全体にわたる一般的又根本的研究を背景」にもつと評価してい
る。

一方、晩年の宣長にとっても「とかく開けがたき」京都において
古学（国学）が広がることが宿願であり、寛政五年（一七九三）に
も上京して賀茂季鷹、小沢蘆庵、伴蒿蹊らと親しく交流し、公卿の
芝山持豊や光格天皇の実兄妙法院宮真仁法親王にも関していた³⁶。宣
長の願いは少しずつ実現していき、寛政九年には後に京都鈴屋門を
形成する上田藤介（百樹）・城戸萬次郎（千楯）・長谷川伊三郎（菅
緒）が宣長に入門する³⁷。そうした中、宣長自筆とされる「来訪諸子
并聞及諸子」の寛政一二年六月の記述が注目される

六月衣川舎人より申来ル

一、萩原二位殿御舎弟員衛主、モトハ垂加流ノ処、大祓後尺ヲ
見ラレ大ニ古学ニ向ハレ候由、勿論卜部ノ神道非ナル事合点
ニテ、此節改メタク思ハレ候由也、富小路殿モ万葉ズキニテ
古体ヲ好マレ候由、日野殿ノ御孫モ古体ヲ好マレ候由也

同断

一、西依儀兵衛高弟興田十左衛門吉（錠）³⁸ト云ハ、若狭ノ儒者
ニテ当時西依ガ京ノ宅ニアリテ、カノ学ヲ伝フ、コレモ垂加
流ナリシガ、後尺ヲ見テソノ非ヲサトリ当時モツハラ古学ニ
ナレル由也

京都公家社会への古学浸透の状況とともに、他の四〇余人の来訪者
は、在国名、人名と年月日が簡潔に記される中、唯一人吉従の宣長
古学への傾倒が詳しく書かれている。

実は、文化元年（一八〇四）三月から七月になされた『万葉集』
の伴信友書入れ本³⁹には、宣長の説を詳細に書き入れた後にそれを紹

介した吉従について

信友云、右ノ吉従が大人ニ相見セシハ寛政十二年ノコト也、晩年ノ御説ナレバ定論トスベキ也

とある。寛政一二年六月、衣川舎人（長秋）の紹介で興田吉従は本居宣長に初めて対面していたと考えられる。

なお、宣長『授業門人姓名録』によれば、同年年六月には吉従旧知の「若狭小浜^{六月}_{遠敷郡今大城}岡崎青宇 俊平」が宣長に入門している⁽⁴⁰⁾。

吉従と岡崎俊平は六月に二人そろって宣長に対面した可能性が高いが、ほとんどの宣長『授業門人姓名録』には興田吉従の名前はない。ただ山崎美紗子氏が述べるように上妻文庫本だけは享和元年に興田十左衛門の入門を載せる。鈴木淳氏は『本居宣長と鈴屋社中』⁽⁴¹⁾の中で衣川長秋が「恣意により上妻本に付加した」とするが、そこには京都望楠軒や小浜順造館で垂加神道を学び、順造館で崎門学を教授する興田吉従の古学傾倒に対する宣長の大きな期待があった。

(二) 享和元年、本居宣長の上洛と吉従

本居宣長は、翌享和元年（一八〇一）、京都の門人たちの要請を受け古学普及のため上洛をする。三月二八日に松坂を出て翌日遅く入京し、六月九日に上京、一二日松坂に帰着するという七五日に及ぶ大旅行であった。

この宣長最晩年の上洛は、都の公卿から町人まで、また全国から来訪した門人等を相手とした歌会や講書、杜寺参詣などが日々精力的に行われ、必ずしも体調のすぐれなかった宣長は、五月には卒倒して一時、意識不明となり門人たちを大いに心配させた⁽⁴²⁾。それでも

回復すると、来訪者に会い、講釈を続け、宣長の上京は都においても話題となっていた。

この上京については、宣長自筆の『享和元年上京日記』のほか、高弟石塚龍麿（遠江在）の『鈴屋大人都日記』（以下『都日記』と略）がその動静を詳細に記しており、また宣長三女能登の婿で伊勢神宮外宮の御師安田廣治（豊秋）も日記『京みやげ』を遺している。

その中で宣長自筆日記は、四月「廿四日 晴天 若狭小浜人酒井修理大夫殿内、西依氏門弟 興田十左衛門吉従 入来⁽⁴³⁾」と記す。日記からは小浜から直接在京の宣長に「入来」したと読めるが、実は、吉従は入京前に四月九日、伊勢神宮に参詣した後、「松坂の駅にとどまり」妻の病気で宣長の上京に同伴しなかった宣長の養嗣子稲掛（本居）大平を訪問している。大平から大平・宣長問答の「万葉第十四東歌疑問」⁽⁴⁴⁾を借り受けて、長雨で逗留した河内国弓削村の小枝友直宅で四月二〇日に書写している。「東歌疑問」の吉従識語は、「はじめ」の大平訪問と記すが、両者の親密さには、宣長が介していたと思われる。

吉従の京都四条の宣長旅寓への入来について、石塚龍麿『都日記』は四月二三日とし、「くれつかた若狭人興田吉従とひ来て^{ヨサユ}」として、次のように和歌の贈答を記す⁽⁴⁵⁾。

後瀬山みねに生てふ椎柴のしはく見まくほしき君かな
とよみてその山の椎柴をつかにしたる筆とりそえてまゐらせける、かへし師の君

後瀬山のちもわするな椎柴のしはし都のたひのむつひを

この吉従と宣長の歌は、『万葉集』の坂上大嬢と大伴家持に後瀬山を「逢う」の歌枕とした贈答歌（相聞歌）を踏まえており、そこに、吉従は中世以来有名になった後瀬山の椎（筆）を付け加えた。（なお、初対面の龍麿は吉従に「ヨサユ」とルビを附す。）

『都日記』が吉従に関して、四月二七日の宣長の『古語拾遺』講釈の聴講を、かねてから約していた正三位富小路貞直が当日風邪で出席できないと「吉従にいひおこせ給へり」と記すのも注目される。⁽⁴⁶⁾ 吉従は自ら宣長の講釈に列するだけでなく、富小路貞直とは秘書的役割も果たすほど親密であった。

吉従の京都滞在が一月に及んだ頃、宣長は自らが「鴨川納涼」と「嵯峨山松」の兼題を出して公卿、諸大夫、そのほか伴蒿蹊などの地下歌人から歌を求め、四条旅宿では歌宴を催した。『嵯峨集』はこの時五九人から得た歌を集録したもので、宣長のような地下の出題に応じて公卿が詠進するのは異数であった。歌集を纏めることのできた宣長は甘心を禁じえなかったとされる。⁽⁴⁷⁾

この歌集に、二人の公卿諸太夫の和歌に続き二九歳の「吉従若狭人
興田十左衛門」の次の二首が載せられている。⁽⁴⁸⁾

たちよれば河合の杜の梢より涼しくかよふ賀茂の川風

花に見しみとりの色や春秋のへたてあらしの山の松かえ

五月二七日、吉従は一月余の京都滞在を終えて宣長に暇乞いをする。その折、

ふるさとの人に見せはやおりいたす君か言葉の錦えてしかと詠んで、「師の御歌」を短冊に書いていたきたいと乞うと、宣

長は

まくはしき錦ほりする君かめにいかにかも見む藤のあらたへと短冊をものして吉従に贈った。宣長に続いて『都日記』の作者石塚龍麿（遠江国在）も

天雲のそきはをりとも後瀬山のちも絶せすことかよはさねと贈る。吉従は返しとして

立わかれとほつあふみの名にしおはことかよふともさふしかりなむ

と詠んでいる。⁽⁴⁹⁾

これらの歌のやりとりからも、吉従の宣長及び門人石塚に親炙する吉従の姿、短冊を与えるなど吉従に丁寧に対応する宣長の姿がうかがえる。なお、この時のことは小浜藩でも話題となったようで、藤林誠政の「座側雜記」巻一一（酒井家文庫）に、石塚辰麻呂「宮古日記」からの抜書「興田吉従詠歌の事」が載せられている。

吉従帰浜の少し前と思われるが、安田廣治（豊秋）の『京みやげ』⁽⁵⁰⁾には、富小路貞直卿、豊秋と吉従の三人の間で交わされた興味深い和歌が載せられている。

吉従

二葉草ふた、ひもかとみしめ縄かけし心を神やしりけむ

返し 富小路殿

神山の神にいのりて二葉艸二度とおもふ君にあひにき

おき田ぬしにのみてまゐらす 豊秋

古をふかくしぬはすわたの底おきたの君はむかしくも有か

返し

吉 従

しぬふともいかでしらす伊勢海の清き渚にみるめなき身は

三人の古学を学ぶ同志としての親密さから歌の贈答がなされたか。そこには、貞直卿と豊秋の宣長古学に傾倒する吉従への期待、励ましが窺える。

多くの門弟に見送られて六月一二日、松坂へ帰った宣長は、長期在京の疲労もあつてか九月二九日、急逝する（享年七十二歳）。

（三）享保二年の藩校順造館新築と神書開講

吉従が一月余宣長と共に過ごした京都から帰浜した翌享和二年（一八〇二）、順造館が規模を大きくして建て替えられた。この新築に関連して、順造館の教授内容に経書だけでなく神書の開講を加えることを巡って、父「丹右衛門勤功」により教授役を継いだ西依三郎平（孝鐸・二九歳）と興田十左衛門（吉従・三〇歳）、稲庭良助（公正・五〇歳）などの間で「議論」があつたことが、同年三月二日に老役（老中）となつた鈴木三太夫（重陰）が後日に取りまとめた一連の史料（鈴木重威家文書）から窺える。

稲庭は、前々年の寛政一二年一〇月に「竊論神儒両道」を書き「本トハ日本モ唐モ一周天ノ下ニ開ケシ国士ナレバ同シ天メガ下ト云処ハ同シ」也」と述べて殊更に「日本ノ道」「唐ノ道」と対立せずそれぞれの「国ニ伝ハリシ道ヲ以テ世ヲ治メテユクハ理ノ当然也」と論じていた。順造館においてもその頃から、神道を巡る議論が起つていたようである。ただ稲庭は鈴木家史料の「口上」では年若い孝鐸が教授役として藩校を主導することへの不満もあつてか、神儒両

道の順造館での教導方は免ぜられたいとしていた。

西依孝鐸は、従来の方針「第一経業道之詮議ニ力を用、餘力を以て国典等之儀漸次講究可有之事」により、神書開卷を希望する者には経業の力を試して希望の当否を決めたいとした。

鈴木家史料には吉従（十左衛門）の直接の口上などは見当たらないが、稲庭の「口上之扣」には、

十左衛門方神道講書之儀者、先達而御談御座候義、殊に此間御書付之内ニモ、経書開卷之後神書開講も御座候様ニ御書付御座候上ハ、弥以於学問所神書被読候心得ニ御座候

とある。ここでいう「書付」とは、寛政二年以来長年「学問所懸」で老役であつたが享和二年三月には隠居していた小原操によつてなされた議論の裁定と考えられる。

小原の裁定は「神道儒教教導之筋」に議論の喰違ひはないとして、経書開講の後、神道の誓約者だけが神書開卷を行ない、その後は「十左衛門門弟」と「三郎平相談之上」館中差支えがないときに出場、講談を認めるというものであつた。

小原の裁定は、稲庭が「殊ニ興田方者学力も勝レ申候処ハ御召抱と被為蒙者神儒両道も兼備仕候」と一目を置いている興田とその門弟の神書開講の要望を採り入れた妥協案であり、小原は「学館一新」の折の教導筋の一致を求めていた。

また、小原は但書で

但道之本源之詮議者拙者共不案内之事ニ候得共、指当り日本之事不案内ニならぬ様是又館中ニ而教導可有之事と存候

としており、喰違いは「道之本源之詮議」における宣長の古学に基づく神書開講をめぐるの議論ではなかったか。

ただ、稲庭の「口上之扣」は、老役鈴木への口上と考えられ、前述引用のすぐ後に「神書開講被為止メ思召ニ候ハ、」その旨を別段に吉従に話してほしいとする。順造館の神書開講を巡っては儒者の間だけでなく重臣層の間にも見解の相違があったようである。

この時期は、例えば井伊家彦根藩では寛政一一年藩校創立と同時に「和学方」教授に鈴屋門の小原君雄らが抜擢され、古事記、六国史や和歌が教えられるなど、いくつかの藩校において国学が開講されていたこともあり、小浜藩でも「指当り日本之事不案内ニならぬ様」とされたと考えられる。

この享和二年の神書開講を巡る議論がかなり激しかったことは、吉従の宣長養嗣子本居（稲掛）大平への「三月十五日」付書状⁵⁶からも推測される。書状は「此葛一袋拙哥一通」を「桜根大人」（宣長の諡）の「霊前」に供えていただきたいとし、続いて「旧冬并先書ニ申上候事件共幾重ニも御商量被下度候」と記しており、「事件」とは享和二年の神書開講に関わる可能性が高い。

吉従はこの書状を宣長最後の上京時、和歌を贈答し合った宣長の婿で外宮御師の安田豊秋へも披歴を望み、また、遠路ながらなんとかして「大人御説」を拝聴したいと述べており切迫感のある書状となっている。

また、吉従由緒書によれば、裁定の二か月後、藩主忠貫参勤の同年八月、「家業筋用向」での江戸行きを「奉願」して江戸へ行く。「若

殿様」（酒井忠進）への神代巻の講書を熱心に行ない、滞在は二月に及ぶが、「家業筋用向」とは忠進への進講だけではなく、藩校順造館での神書開講について養父山口風簷などへの了解が主ではなかったか。

崎門学の一拠点であった小浜藩順造館では、垂加神道に関わる神書の講釈は西依成斎によりなされており、寛政一二年頃から享和二年にかけての神書開講の議論は、藩校順造館の新築と藩校の「改格」⁵⁶と絡んで、興田吉従の宣長古学への傾倒がもたらしたものと考えられる。鈴木家史料などからは、山口春水の小野鶴山招聘の推挙以降、小浜藩の崎門学（垂加神道）の学統には根強いものがあつたことが窺え、吉従の企図が十全に実現した神書開講がなされたかどうかは明らかではない。

そうしたなか、若殿様（酒井忠進）や藩主忠貫に「御次御給仕方」として勤めていた伴信友は、宣長入門を願ったが宣長の急逝で間に合わず享和元年秋、本居大平により宣長の没後門人とされた。信友は、寛政七年から文化五年まで連続して藩主の参勤交代に随従し、毎年江戸と若狭を往復していた⁵⁷。その中で唯一、享和元年の藩主上国には随従しなかったが、翌同二年二月「小濱江被招呼」⁵⁸ている。杉田玄白『鵜斎日録』も「廿三日 伴州五郎小浜勤務被仰付」とあり、信友の小浜への呼出は耳目を引いたようであるが、二月から八月まで小浜在勤であった信友は、順造館での吉従などの神書開講をめぐる議論に接したことになる。そしてこのころから、吉従と信友の間で古写本の書写、校合などの学術交流と協同が本格的に始まる

- (14) 小出昌洋解題『続日本随筆大成 二二』(吉川弘文館、一九八一年) 五頁。
- (15) 「文化八辛未改 由緒書」(江戸由緒書) 二、ツゝマ之部、酒井家文庫。山口風簷(信八郎・重深)は寛保元年(一七四一)生まれ。山口春水(安固)の六男。明和七年小野鶴山(忠市郎)が死去すると「忠市良家業相統被仰付式拾五人扶持」。文化三年六月二日死去。六六歳。以下、風簷の記述は主にこの由緒書による。
- (16) 山口晋山撰『鶴山先生小伝』は、近藤啓吾『小野鶴山の研究』(臨川書店、一九九二年)に拠った。
- (17) 近藤啓吾『若林強斎の研究』(神道史学会、一九七九年)二五―三二頁。
- (18) 注5『南学史』七七四頁。金本正孝「望楠所聞成立考」(『強斎先生語録』溪水社、一九九一年)三三六頁。
- (19) 西依墨山(丹右衛門・景翼)については、注12由緒書。
- (20) 注6参照。『目録』文379。
- (21) 注19参照。
- (22) 注15参照。
- (23) 「西銘解師説」(京都大学付属図書館蔵。牛尾弘孝「書評 近藤啓吾著『山崎闇斎の研究』」(『中国哲学論集』一三〇号、一九八七年)。
- (24) 四月二十四日、曇る、岩倉家に食し、西依義兵衛周行に入る」(『高山彦九郎京日記』高山彦九郎先生頌讃会、一九四一年、八一頁)。また、寛政七年六月の西依墨山「覚」には「三四年前、奥田文蔵方在京之砌」に望楠軒の内弟子や西依孝鐸と蔵書の虫干しをしたとある(岸本三次編『西依成斎―基礎資料集』岩田書院、二〇〇五年、二四四―二四五頁)。
- (25) 松本丘「近世祠職の思想的活動―祇園社を例として」(明治聖徳記念学会紀要)復刊三二号、二〇〇〇年) 参照。
- (26) 溝口武進「寛政壬子夏因台命白銀二十枚西依成斎先生拝領記録」(岸本三次『西依成斎基礎資料集』一三四―二四〇頁)。(『目録』文144)。
- (27) 『目録』文214。
- (28) 鈴木温「處士西依先生行状」(『目録』155)、奥田吉従「書成斎西依先生行状後」(岸本三次『西依成斎基礎資料集』一三一―一三二頁)。
- (29) 山口勝久家蔵山口久三翁油印本、注28岸本同四五―四九九頁。この「雑話」を『神道大系』論説篇、垂加神道上の近藤啓吾解題や金本正孝「強斎先生語録」(337頁)は、寛政七年の執筆としている。
- (30) 「酒井家編年史料稿本」文化十一年九月六日に「本丸番深栖主税光坦光典没ス」とあり、光坦は鞠山藩の酒井飛騨守忠香の末子と記す。なお、西依孝鐸「文化十一甲戌年 日記」十月八日は「△深栖殿神主参ル、明朝奥田氏へ早く渡可申事」とある。
- (31) 京都府立京都学・歴史館蔵。
- (32) 「酒井家編年史料稿本」文化四年二月九日参照。
- (33) 「文通諸子居住處并轉達所姓名所書二 来訪諸子并聞書及諸子」(『本居宣長全集 第二〇卷』三三六頁)。
- (34) 『本居宣長全集 第七卷』。
- (35) 村岡典嗣「増補 本居宣長1」(東洋文庫、二〇〇六年)二〇五頁。
- (36) 城福勇『本居宣長』(吉川弘文館、一九八八年)一八三頁。
- (37) 「授業門人姓名録 追加本」(注33、二二八―二二九頁)。
- (38) 注33参照。
- (39) 「信友書入れの万葉集」『春日政治著作集 5 万葉片々』昭和五九年

勉強社 二六頁。

(40) 注37、三三頁。『本居信長事典』岡崎俊平によれば、小浜商人の出で当時、大坂住、丘岬俊平ともいい、若狭からの唯一の宣長入門者。荒木田久老の門でもあった。著書に享和三年刊の「新撰字鏡校異」等がある。

(41) 鈴木淳「第三章『授業門人姓名録』と門人の範囲」(岡中正行・鈴木淳・中村一基『本居宣長と鈴屋社中』錦正社、一九八四年)。

(42) 注9『本居宣長全集 別巻三』一四四頁。

(43) 『本居宣長全集 第一六巻』六四六頁。

(44) 稲掛大平「万葉第十四東歌疑問」(『嵐山屋雑鈔』五、京都大学付属図書館蔵)の吉従識語は、「享和元年四月九日伊勢神宮にもうでけるついでに松坂の駅にとどまりければ稲掛大平をはじめととひぬ」とあり、伊勢神宮参詣の後の入京であった。

(45) 注42、一三九頁。

(46) 注42、一四一頁。

(47) 鈴木淳「解題」(『本居宣長全集 別巻三』)。

(48) 「鴨嶋集」『本居宣長全集 別巻三』八一頁。

(49) 注(42) 一五九頁。なお、『京みやげ』(『本居宣長全集 別巻三』一二二頁)では「若狭岡の小濱の人興田吉従ぬしにはしめてあひける時よみてまゐらす龍麻呂」と詞書がある。また、本居宣長「麻袋吉紀」云枕詞考(『嵐山屋雑鈔』五(京都大学付属図書館蔵)の吉従識語は「右ハ本居宣長か考を其門人尾張名護屋植松忠兵衛有信といふ人の記せしなり、そを遠江国人石塚龍麿よりて借て写ぬ／享和元年五月廿四日夜旅窓下書之 吉従」と記す。

(50) 『本居宣長全集 別巻三』一一四頁。

(51) 小浜市立図書館蔵、【資料番号】00017-002-11。

(52) 西依家文書、文7-32。

(53) 鈴木家文書には神書開講への出席(希望者)名簿と思われる「於学問處晦日九ツ時」と書かれたものがあり、鈴木乙雅・成田莊三郎など有力藩士の子弟と推測される二名の名が挙げられている。吉従は、門弟に自宅で教授していた。

(54) 中村一基「藩校と鈴門 本居派および他派混成の藩校について」(『岩手大学教育学部研究年報』四三巻一号、一九八三年)。

(55) 真崎文庫・資料番号M0108、大館市立栗盛記念図書館蔵。

(56) 注51には享和二年六月の「順造館建替二付建言」と「順造館規則受書覚」があり、藩校の刷新が建言されている(『福井県史 資料編9』三四四-三四六頁)。

(57) (文化八年／辛未会) 由緒書一、イータ信、酒井家文庫。伴信友「鈴屋翁略年譜」『本居宣長全集 別巻三』。

(58) 杉靖三郎編校『鶴斎日録』(生活社、一九四四年)四九五頁。